

<実践事例>

海外語学研修の調査課題からみたタイと日本の比較に関する考察

今村 良平¹・米山 昂佑²・金子 暁³・木津 夏月美⁴

近年、大学にグローバル人材の育成が求められており、事務職員の国際的な資質を高めることを目的として、各大学が事務職員対象の海外研修を実施している。京都産業大学は、2012年に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択されたこともあり、毎年海外語学研修を実施している。2015年8月には、タイのチェンマイ大学附属語学センター（Language Institute Chiang Mai University。以下、LICMUとする）にて、昨年に引き続き語学研修が実施された。グローバル人材は、以下の3つの要素で定義される。①語学力・コミュニケーション力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーである。今回の研修では、英語トレーニングとは別に研修課題として、自身の興味や業務内容に関するテーマによる調査が求められた。本稿では、定義の1つである「異文化に対する理解」を意識し、参加者4名の調査に関する報告および研修に対する振り返りを行う。

キーワード：海外語学研修、グローバル、タイ・チェンマイ、文化比較

1. はじめに

タイは、日本の約1.4倍の面積で、約6,860万人（2014年）の人口を有するASEAN加盟国である。主要産業は、農業および製造業で2014年のGDPは4,048億ドルと東南アジアではインドネシアに次ぐ経済規模を誇っている。日本とは2007年に日タイ経済連携協定を発効したことで貿易のみならず、幅広い分野における経済関係の強化が期待されている。2014年には日本はタイにとって外国直接投資額のうち29%を占める最大の投資国となった。観光面では、伝統文化を楽しめる観光地として人気で2014年に約126万人の日本人がタイを訪れた。様々な分野において、両国は友好な関係にあると言える。今回の研修先のチェンマイは、タイの首都であるバンコクから北方約720キロに位置し、自然豊かな環境と伝統文化が印象的なタイの第2の都市とされている。

語学研修プログラムでは、本学職員向けに用意された英語トレーニングコースとして、少人数制でのビジネス英語、スピーチ・プレゼンテーショントレーニング、ビジネスミーティングの授業が実施され、加えて現地事務員とのマンツーマン英会話、タイ学生向けに開講されている英語クラスへの参加等により語学力の向上が図られた。そし

て、市内各地の文化施設を訪問する文化ツアーや伝統舞踊体験等、タイ文化や伝統等を十分に感じられるプログラムも盛り込まれており、非常に充実した研修内容であった。

本研修に参加するうえで、参加者には事前に現地での調査課題が求められており、自身の興味や仕事に関係する事柄について調査を行った。調査の各テーマは、①大学進学について、②英語教育について、③スポーツ事情について、④大学施設の開放状況である。研修中は事務員および学生等とコミュニケーションを取る機会が多く、会話の中で具体的な日本とタイの違いを感じる事ができた。次章より本調査について報告を行うと共に、今回の研修を振り返ることとする。なお、執筆は①を米山、②を木津、③を今村、④を金子が担当した。

2. 大学進学について

大学進学率を日本とタイで比べると、2011年度で日本が52%、タイが47%であり、両国で進学率は近い値を示している。日本では大学進学の原因として、「就職に有利」、「学歴取得」、「資格取得」等、就職を見据えた理由が多いが、タイでも同じ理由が高くを占めるのだろうか。また、大学を選

¹ 京都産業大学 体育教育研究センター、² 京都産業大学 入学センター、³ 京都産業大学 管財部、⁴ 京都産業大学 国際交流センター

択する際は、何を重視するのだろうか。現地の学生や LICMU のスタッフにヒアリングを行い、このことについて調査を進めた。

調査の中で、タイでは大学進学をするのが当然であるような風潮が感じられた。大学進学理由としては、「給料の高い職に就くため」、「語学を学ぶため」等、やはり就職を見据えた理由が主に挙げられた。2015年タイの高卒と大卒の初任給では、高卒が約10,000バーツ(約34,000円)、大卒が約14,000バーツ(約47,000円)と金額に差が見られる。日本では、高卒が約170,000円、大卒が約200,000円と金額に差が見られ、高卒ではなく大学卒業後に就職を希望する理由の一つとして挙げられる。またタイでは、格差社会に対する不満により近年暴動が発生している。2014年のGDPを見ると、タイのGDPは世界32位であるのに対し、一人当たりGDPは96位であり、この数値から見ても格差社会の現実を推測することができる。LICMUでは、事務員、学生共に英語が堪能であり、加えて他の言語についても習得する者が多く、学びに対する意欲が高いと感じた。その背景には、タイ社会における経済的な影響が大きく、より良い就職先に就職するためのスキルを取得しようとする強い姿勢があるのではないかと考える。

次に、大学を選択する際に重視するポイントを考える。日本では進学する大学の選択理由として、「学校のレベル・偏差値が自分に合っている」、「自分の学びたいカリキュラムがある」、「通学に便利」、「就職率が高い」等が上位を占める。大学側もこの点を意識して、高校生に向けて大学の広報を行う傾向にある。チェンマイ大学の学生に大学を選んだ理由を尋ねたところ、「学びたい専門分野がある」、「通学に便利」、「チェンマイという土地が好き」という意見があった。まず「学びたい専門分野がある」について、チェンマイ大学は、文系・理系併せて17学部3研究所を設置し、中でも国内有数の規模を持つ医学部は高い業績を持っている。実際にタイ高等教育委員会による調査で教育分野、研究分野ともにランク1位の評価を受けており、学問に意欲的な生徒にとって魅力的な大学と言える。次に大学の「立地」の点では、大学が所在するチェンマイという土地は学術都市、観光都市としての色合いが強く、自然も豊かで日本の京都とも類似している点が多い。その歴史の長さや都市の格から第2の都市とされており、土地に対する評価は高い。以上のことが、チェンマイの学生の大学選択の理由の背景にある。日本における大学の選択時に重視されがちな「就職率の高

さ」と比較すると、タイでは就職率はあまり重視されていないことがわかった。日本の大学には就職支援の窓口が設置されているのが通常だが、タイの大学にはそのような支援窓口はあまり存在しておらず、大学卒業後、自身で進路を考えるとというのが一般的である。そして、タイ企業では、「即戦力」を求める傾向が強く、大学生はそれに応えるべく勉学に励まなければならない。この点では日本と少し事情が異なっている。

日本とタイの大学進学事情について、進学率や動機等の部分で類似する点は多くあるが、日本とは異なるタイの社会情勢の中で、就職に関する考えや将来の目標の部分に根本的な違いがあった。

3. 英語教育について

タイの公用語はタイ語であり、日本人と同じように英語を外国語として学んでいる。しかしながら、研修の行われるチェンマイ大学には英語が堪能な学生が多いこともあり、彼らがどのように英語を学んでいるのか、タイ国内の英語教育について調査を行った。また、チェンマイ大学の事務職員についても、どの程度の語学力が求められるのか、大学で実施されている語学研修にはどのようなものがあるのか、現地のスタッフにヒアリングを行った。

タイ国内の英語教育については、実際に就職する際、タイ国内ではどの程度の英語力が求められるのか、チェンマイ大学を参考に、研修先であるチェンマイ大学附属語学学校(LICMU)のスタッフにヒアリングを行ったところ、LICMUは海外の機関とのやり取りを行う窓口となるため、高い語学力を持った人材が求められるとのことであった。実際、我々の研修期間中、同時進行で学生向けの英語研修プログラムや教職員プログラムが行われており、そのプログラムのアレンジはLICMUのスタッフが行っていた。フィールドトリップへ参加する際もスタッフが同行し、参加者への案内は英語で行われるため、学内外双方において、コミュニケーションには全く困らなかった。また、このような英語を日常的に使う部署だけでなく、学部事務室や経理部等の部署においても英語力が必要とされてきており、チェンマイ大学では、実際、外国人との関わりが薄い部署であっても、部署内に必ず数人は英語が話せるスタッフが配置されており、この点が本学とは異なると感じた。

また、学内職員向けの語学研修プログラムについてもヒアリングを行ったところ、本学のような海外研修プログラムは特に無いとのことであっ

た。しかしながら、LICMUのスタッフで英語力が不足している職員がいた場合、LICMUで開講されている英語授業を午後に履修しなければならず、更にネイティブスピーカー教員との会話練習も毎日行わなければならない。加えて、LICMU以外の事務室にいるスタッフについては、安い価格で学内の英語授業を履修することが可能となっている。本学でも自己啓発研修助成制度があるが、学内に職員が受講できるような制度は設けられていない。講師の確保の方法や人件費等、検討しなければならない点も多いが、今後の本学における英語研修プログラムの充実を図るにあたり、職場にて英語の授業が受講できるという制度は面白い取り組みだと感じた。

4. スポーツ事情について

チェンマイ大学の多くのクラブは、the Student Union（日本で言う、学生会）に加入しているが、その中で二つの種類のクラブに分類される。その一つは、課程活動クラブであり、もう一つは、スポーツクラブである。

課程活動クラブとは本学でいう文化団体連盟であると推察される団体である。

スポーツクラブは体育会団体であると推察される団体である。（表1参照）

ペタングはフランスが発祥で、簡単に説明すると地面に描いたサークルを基点として木製の目標球（ビュット）に金属製のボールを投げ合って、相手より近づけることで得点を競うスポーツであり、地中海沿岸諸国をはじめ、アフリカ、アメリカ、カナダ、タイなどにも広がりを見せ国際的なスポーツとして急成長している。

表 1. 課程活動クラブとスポーツクラブ

課程活動クラブ	スポーツクラブ
学術研究クラブ	バスケットボールクラブ
ボランティアクラブ	フットボールクラブ
音楽クラブ	バドミントンクラブ
写真クラブ	スイミングクラブ
	ペタングクラブ
	テニスクラブ
	バレーボールクラブ
	ソフトボールクラブ
	ボクシングクラブ
	ボードゲームクラブ
	卓球クラブ
	陸上クラブ

ボードゲームとは、日本で言う囲碁、将棋、オセロに似ていて、ボード（盤）上にコマやカードを置いたり、動かしたり、取り除いたりして遊ぶゲームである。チェンマイではボードゲームをスポーツとして認知していることや、日本ではメジャーな競技である野球ではなくソフトボールが盛んであるとのことであり、日本のスポーツ事情と随分違いがある。

チェンマイ大学の学生会（The Student Union）は、クラブ活動を促進するように働きかけていて、学内外で、多くのスポーツに参加することができるシステムが構築されている。また、タイの伝統的なスポーツであるムエタイ、ソード・ポール・ファイティング、タクロー、セパタクロー、タイダンスなどの指導を受けることも可能である。

チェンマイ大学は、毎年、タイ人の学生と留学生のためにウォークラリーを実施している。この活動は、留学生のためのオリエンテーションの一環であり、在校生が他学部の学生と交流するだけでなく、新たな留学生も交流する良い機会となっている。また、この活動は、健康促進のために運動をすることを推奨する目的もあり、面白い取り組みであると感じた。

チェンマイ大学は広大な敷地面積があり、競技場やプールなどすべてがキャンパス内にある。学生は自由に大学内の運動施設を使用できる環境にあり、課外活動とスポーツクラブで活動することができる。本学では授業と課外活動団体の使用で使用施設が飽和状態である。京都産業大学の学生のスポーツ意識や健康面からみると、本学でも一般学生もいつでも自由に使用できる運動施設（陸上競技場・野球場・サッカー等球技場・体育館）の拡充が必要ではないかと思われる。

また、チェンマイ大学の入試制度（特待生プログラム）に、「(a) GPA と GPAX で優秀な成績を取得した者、(b) スポーツにおいて将来有望な業績を持つ者、(c) 社会貢献分野で、特筆すべき業績がある者、(d) エンジニアリングにおいて、将来有望な業績を持つ者」がある。この考え方は、実績を残した学生だけを確保するのではなく、原石を確保し人材育成をしていくという本学のポリシーと一致すると感じ共感した。しかし、将来有望な業績を持つ者を判断する基準等をどう明確にするのか議論が必要である。

5. 施設開放状況について

チェンマイ大学は、17の学部と3研究所を持ち、学生数約24,000人（本学：約13,000人）、約4km²

(本学:約0.4km²)の広大な敷地をもつ総合大学である。敷地内には陸上競技場や体育館, サッカー・ソフトボールができる芝生等が設けられている。キャンパス周辺には, 多くの屋台が軒を連ね, 深夜2時まで多くの学生でにぎわっており, 学生寮やアパートもキャンパス近くに多く隣接している。敷地が広いので, 一般の車両や人々が多く通行し, 生活する人々の通行道線にもなっている道路が, 各学部棟の間に設けられている箇所もある。表面上で捉えると, 大学と外部との関係が近く, 大学が街の一部を形成しているような構造になっている。では, 実際に大学と外部の接点はあるのかどうか, 現地のスタッフにヒアリングを行った。

まず, 学外者の大学施設利用について, 本学では神山祭・サタデージャンボリー等のイベント, 高校生入試, 京都市周辺小・中・高等学校への貸し出し, 神山天文台での展望会等での利用があげられる。チェンマイ大学においても, イベント時等で施設の貸し出しを行っており, 学校関係のみではなく, 企業にもイベント時に各施設を貸し出すことができるのは本学と少し違った点である。体育施設については, 授業や課外活動での使用がなければ使用することができる。芝生については, 大学と外部とを隔てる塀が設けられていないため, 空いて入れば自由に使える。タイでは, 運動場のような広場が, 日本のような公園や整備された河川敷の広場のようなスペースがない分, 大学の施設は地域に大きく貢献している。ただし, この塀で隔てられていない, 芝生の広大なスペースについては, 研修に参加した2週間の間では, 空きスペースになっている印象があった。日本の場合, 自由に使える芝生があるとすると, 各サークルや課外活動で多くが埋まる, もしくは少年野球やサッカー等で埋まるイメージがある。故に, スポーツ面から捉えれば, チェンマイではあまりスポーツに力はいれられていない, また施設を有効に使えていない点も感じた。また, チェンマイ大学では, 施設の貸し出しや使用の他に, 教員が無料で教育や農学・英語の授業を行う活動も行っており, 大学が地域に貢献していることがわかった。

本学では, 施設を地域に貢献するために授業以外で活用していくには, 施設の空き時間が少ないことから限りがあるが, チェンマイ大学については, 敷地の広さや空き状況から多くの活用方法があるように感じられた。これは同時に, 本学における学生の大学利用の高さもあらわしている。

施設をよりよく活用するために, 施設をどう使用するのか, その活用の内容と必要性を吟味, 整

備していくことが, 学生のためにも, 地域へ貢献するためにもまず必要であると感じた。

6. まとめ

以上, タイの大学事情を調査し日本と比較する中で, 次のとおり考察を深めてきた。

(1) 大学進学について

大学に進学する理由, また進学する大学を選択する理由については, 日本とあまり相違が見られなかったが, 就職活動については, 日本では大学在学中, 就職窓口を起点に就職活動が進められるものの, タイでは大学卒業後, 自身で進路を選択し, 進めていくという点が大きく違っていた。

(2) 英語教育

本学では語学力向上等を促すため自己啓発助成制度が設けられているが, タイでは教職員の語学力を向上させるため, LICMUでの英語授業の履修やネイティブスピーカー教員との会話練習等, より語学力を向上させようという姿勢が伺えた。

(3) スポーツ事情

課外活動におけるモチベーションの高さは, チェンマイ大学よりも本学の方が上であるが, 施設が十分でないのが現状である。その点, チェンマイ大学は敷地的な広さ, 大学近辺に寮やアパート等を多く構えているという条件の元, 今後のスポーツ推進の活動方法によっては, チェンマイのスポーツ事情を大きく変える可能性を秘めていると考える。

(4) 施設開放状況

チェンマイ大学の広大な敷地と, 塀で隔てない構造から, 大学と街との関連は高い。しかし, そうした関連は設備的なものだけでなく, 実際自由に体育施設や芝生を利用できることや教員が地元の人に勉強を教えている点から, 施設を地元の人にも開放しようという姿勢が見られた。

今回の海外研修を経て, 社会情勢・環境が如何に大学と密接に関係しているのかを実感し, 今後, 大学をより発展させていくために, 現代社会の動きを多方面から観察することが必要不可欠であると再認識することができた。

謝辞

このような貴重な体験を与えてくださった大学は勿論のこと, 本研修への参加へ快く送り出していただいた職場の皆さま, 並びに私達を素晴らしい環境で迎え入れていただいたチェンマイ大学附

属語学センターのスタッフの皆さまに、深く感謝を申し上げます。

本研修では英語トレーニングに加えて、様々なタイの文化に関するプログラムが用意されており、タイ文化と日本の違いについて身を持って学ぶことができました。今後は、更なる語学力の向上およびグローバルな視野を持つことに努めると共に、学内外でのグローバルに関する取り組みに積極的に参加し貢献できるよう自己研鑽に務めて参ります。

参考文献

- 外務省 (2014) タイ王国基礎データ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/data.html> (accessed 2015.11.30)
- コーンケン大学企画部 コーンケン大学及びタイ高等教育機関の国内・国際ランキング
- 産労総合研究所 (2015) 2015 年決定初任給調査
http://www.e-sanro.net/jinji/j_research/j_research01/pr1507/ (accessed 2015.11.30)
- 日本政府観光局 (2014) タイの基礎データ
https://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/pdf/market_basic_thailand.pdf (accessed 2015.11.30)
- 元林稔博 (2011) タイにおける格差社会と労働分野の「新たな問題」
<http://www.rochokyo.gr.jp/articles/ab1107.pdf> (accessed 2015.11.30)
- 文部科学省 (2011) グローバル人材の育成について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/fieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf (accessed 2015.11.30)
- PERSONNEL CONSULTANT MANPOWER 「タイ大卒者の就職事情とタイ労働市場の現状と課題」
http://www.personnelconsultant.co.th/find_staff/labor_market/ (accessed 2015.11.30)

Report on Comparison of Thailand and Japan through the English Language Training in Language Institute Chiang Mai University

Ryohei IMAMURA¹, Kosuke YONEYAMA²,
 Satoshi KANEKO³, Natsumi KIZU⁴

It has become increasingly necessary for Japanese universities to cultivate global human resources recently. Accordingly, each university conducts overseas training for staffs in order to raise their

international quality.

Following last year, 4 staff participated in an English training program at the Language Institute Chiang Mai University for two weeks in August 2015. This program consisted of English language lectures and Thai culture experience activities. Through this program, participants were required to develop their English ability and global perspectives. Also, participants needed to do comparative research on educational differences between Thailand and Japan. Each participant set a topic which was related to each person's job or interest.

In this report, we mention about the content of the program at LICMU and the research results we achieved.

KEYWORDS: Overseas language training, Global, Thailand Chiang Mai, Cultural comparison

2016 年 2 月 25 日受理

- 1 Center for Physical Education and Research, Kyoto Sangyo University
- 2 Center for Admissions, Kyoto Sangyo University
- 3 Department of Property and Facilities, Kyoto Sangyo University
- 4 Center for International Programs, Kyoto Sangyo University

